

## 日本統治期台湾文学研究

「台湾文芸家協会」の成立と『文芸台湾』 西川満「南方の烽火」から

中 島 利 郎

### 一、西川満の「南方の烽火」

昭和一五年（一九四〇）一月一日、「台湾詩人協会」に代わって「台湾文芸家協会」が設立され、その隔月刊機関誌『文芸台湾』創刊号が発行された。その一日前の昭和一四年二月二日『台湾日日新報』（以下『台日』と略称）に、西川満は「南方の烽火 台湾文芸協会の結成」という一文を発表して、「台湾文芸家協会」（以下、「協会」と略称）設立の感激を、次のように述べている<sup>(1)</sup>。

光輝ある紀元二千六百年を機として、この南方の島に台湾文芸家協会が結成されることは、これが誕生に微力を捧げた一員としては勿論のこと、多年この地にあつて文芸の道を歩んで来た一人としてなんと名状し難い程のよろこびを、切実に感じてゐる。（中略）／協会本来の目的が、文化の向上と会員の親睦にあるは論をまたない。従つて文化の向上を目指すためには、従来綜合誌の育ちにくい台湾の特殊事情に鑑みて、協会が自ら文芸雑誌を刊行する必要があるのである。（中略）／私は、今日、これ以上の理想的な協会組織は考へられないと思ふ。単なる社交機関とせんか、地方在住文芸家の芽生え、いつの日かなる、はた協会の事業を単なる雑誌発行のみとせんか、その偏狭笑ふべし。即ち協会は、講演に、研究に、展覽に、出版に、種々の事業を行ふのであつて、雑誌はその一部門にすぎず、この故に単に台湾在住者のみならず、その連絡は東京は勿論、内地各地、樺太、北海道、鮮満にも及ぶのである。（文中の／は改行を示す。以下、同じ）

西川満のこの記述から「協会」の目的は、「（台湾の）文化の向上と会員の親睦」にあったことが解る<sup>(2)</sup>。また「協会」は、『文芸台湾』という機関誌のみを通した台湾文壇の一元化団体ではなく、「講演に、研究に、展覽に、出版に種々の事業を行」う団体でもあることも一応解る。この言葉に従つて「協会」の具体的な事業を掲げれば、「展覽」や「講演」については、次のようなものがあった。

昭和一五年一月一日から三日間、台湾図書館協会の「図書館週間」に協力し、台南市公会堂で「詩書と美装本の展览会」を主催し、一日平均二百数十名の入場者があったといわれ、また、最終一三日には、「協会」員等による「文芸講演会」が、以下のような演題で行われた<sup>(3)</sup>。

新垣宏一「挨拶」

立石鉄臣「赤い象と遠い星」

前島信次「台南の地誌に就て」

西川満「美しい本の種々相」

島田謹二「台湾の文芸に就て」

さらに同月一日には台湾日日新報社学芸部後援で台北の同報社三階講堂で、以下のような「文芸講演会」を主催した<sup>(4)</sup>。

池田敏雄「挨拶」

塚越正光「市井風流」  
 楊雲萍「台湾文学史の研究」  
 赤松孝彦「詩朗読」  
 立石鉄臣「造型美術談」  
 高橋長蔵「詩朗読」  
 黄得時「現代の支那文学」  
 西川満「華麗島の一少女」

次いで、一月二日から三日間に渡り台湾日日新報社（以下、『台日』社と略称）講堂で、同学芸部及び総督府図書館後援で「台湾文芸資料展」と「名家色紙展」を主催し、期間中にのべ二千七百名の入場者があった。「台湾文芸資料展」では、領台以前から当時に至るまでの約二千冊の書誌を漢籍、雑誌、小説、随筆、詩歌、俳句、川柳、俚謡、限定本に分けて展示した。その後、ここに展示された資料を基に、『愛書』第一四輯（昭和一六年五月一日発行）は、特集「台湾文芸書誌号」を組んで、神田喜一郎・島田謹二「台湾に於ける文学について」及び黄得時・池田敏雄「台湾に於ける文学書目」を収録したが、後者は台湾文学研究に現在に至るまで貴重な資料を提供している。

そして、さらにこの展覧会に前後して、「協会」は『台日』の「読書普及運動」に呼応し、同紙に、以下のような「協会」員の「読書随筆」を掲載した<sup>5)</sup>。

楊雲萍「曝書偶記」  
 魁星楼主人（西川満）「椰子の葉陰 中川蕃氏の随筆集」（以上、一六日）  
 本田晴光「本の想ひ」  
 立石鉄臣「愛書と邂逅」（以上、一七日）  
 池田敏雄「国語教授の実際 国府種武の好著」（一八日）  
 長崎浩「戦線文庫の話（上・下）」（一九・二日）  
 萬造寺龍「本」（一九日）  
 北原政吉「愛書一片」（二日）

以上から、確かに「協会」は西川満が述べるように多彩な「事業」を主催したことは解る。しかし、これらの「展覧」や「講演」は、すべて「協会」が設立され、『文芸台湾』が創刊された一月に集中しており、二月以降にはほとんど行われた形跡はない。つまり、これらの催しは「協会」の設立と機関誌の創刊を記念した行事だったと考えてもよいだろう。なぜなら、その後に行われた「協会」主催の目に付く「事業」としては、同年八月一七日の夜九時四一分に台北放送局（JFAK）から二部構成で放送された「神話と民話」があるばかりで、現在のところ他に目を引くものは無いからである<sup>6)</sup>。従って、西川満は「協会は、講演に、研究に、展覧に、出版に、種々の事業を行ふのであつて、雑誌はその一部門にすぎず」と述べてはいるが、おそらく彼自身の主眼は『文芸台湾』の発行にあったと考えられる。以下、西川満にとって「協会」及び『文芸台湾』とは、いかなる関係であったかを詳述していく。

## 二、西川満と「内地」文芸家

先ず、「協会」の会員組織について見てみよう。

「協会」の会員組織は、「賛助員」及び「賛助会員」と「普通会员」とに分かれ、「普通会员」

の中から『文芸台湾』の「編輯委員」が出ていた。「賛助員」は、協会発行の「内報・貳」(東方文化書局覆刻版『文芸台湾』第二号に添付。以下、東方文化書局覆刻版は東方版と略称)中の「賛助員名簿(五十音順)」によれば、すべて「内地」の著名な文芸家ばかりで、次のように七六名と一機関が名を列ねている。

安西冬衛、飯島正、\* 飯田蛇笏、伊藤整、伊藤永之介、石坂洋次郎、岩佐東一郎、伊良子清白、\* 宇野浩二、小田嶽夫、大鹿卓、大木惇夫、岡崎義恵、岡田禎子、恩地孝四郎、川西英、川端康成、川上澄生、川崎長太郎、川路柳虹、上司小剣、木下杢太郎、木々高太郎、\* 木村毅、小宮豊隆、佐藤惣之助、\* 佐藤一英、斎藤茂吉、\* 西條八十、榊山潤、山宮允、式場隆三郎、新村出、寿岳文章、田中冬二、\* 田村泰次郎、竹中郁、高村光太郎、張赫宙、\* 寺崎浩、土岐善麿、十返一、富沢有為男、那須辰造、中村武羅夫、中村地平、\* 中山省三郎、中川一政、中里恒子、榑崎勤、\* 丹羽文雄、西村真琴、新居格、長谷川伸、春山行夫、\* 火野葦平、\* 日夏耿之介、平塚らいてう、平田禿木、藤沢桓夫、古谷綱武、保田与重郎、\* 保高德蔵、堀口大学、真杉静枝、松田解子、丸岡明、丸山薫、都新聞社文化部、百田宗治、矢崎弾、山口誓子、\* 山内義雄、与田準一、\* 横光利一、\* 吉井勇、\* 吉江喬松

これらの「賛助員」については、すでに河原功氏が「~いずれも西川満が、『愛書』・『媽祖』等を通じて知り合いになった人物で、その関係で台湾文芸協会と機関誌『文芸台湾』に彼らの賛同を得たのである。だが、彼らがどういう形で、どれほどの賛助をしたかについては、実際のところははっきりしていない。私は、内地文壇の延長化・一体化を図ろうとする台湾文芸協会が、その基本姿勢を誇示したものだともみている。また、そうせねばならなかったところに台湾での文学活動の特異性があったのだとも思っている<sup>7)</sup>と述べているが、これをもう少し詳細に検討するならば、次のようになろう。

これら「賛助員」は、いくつかのグループに分けることができる。

第一は、西川満が大学在学中に知った「内地」の詩人たちである。西川満は、昭和三年に早稲田第二高等学院に入学、同五年早稲田大の仏文科に入学し、西條八十、山内義雄、吉江喬松を師とした。その中でマルタン・デュ・ガールの『チボー一家の人々』等の翻訳で有名な山内義雄は、百田宗治編集の詩誌『椎の木』(第三期)の同人でもあり、師・山内との関係から在学中の西川満もこれにしばしば寄稿するようになった。そこで知己となったのが同誌同人の伊藤整、竹中郁、田中冬二、保田与重郎、丸山薫等である。また、同人の一人に岩佐東一郎がいた。岩佐は城左門と共に文芸誌『文芸汎論』を編集発行しており、彼らから『文芸汎論』へ詩を求められてしばしば寄稿するようになり、西川満はそこで安西冬衛、佐藤惣之助、春山行夫、堀口大学等を知り、特に岩佐とは親交を持った。この岩佐との関係が本誌前号で触れた西川満の「文芸汎論・詩業・功労賞」受賞にも繋がるのである。

西川満が早稲田の仏文科に進学したのは、尊敬する高踏的象徴詩人西條八十がいたからである。少年時代から西條の詩に傾倒していた西川満は、中学時代には当時流行の抒情画家加藤まさをと西條の名を借りて「西條まさを」を筆名として、台湾の各紙に詩作を投稿していたほどである。その西條は、大正一年に母校早稲田大学英文科講師となり、第一・第二高等学院の教授も併任し、フランス留学を経た同一五年からは仏文科の助教授(高等学院教授も併任)に就任し、西川満在学中の昭和六年には同科教授となった。つまり昭和三年早稲田第二高等学院に入学した西川

満は、昭和八年の大学卒業まで尊敬する西條を師として仏蘭西文学をそして詩作を学んだのである<sup>(8)</sup>。

「賛助員」の第二は、その師西條八十の交友関係及び早稲田関係文芸家のグループである（上記「賛助員名簿」中で、中退も含む早稲田出身の文芸家は\*印で示した）。詩人として大学の教員として、そして作詞家として西條八十の交友関係は広がった。保高德蔵、木村毅は早稲田の同級であり、田村泰次郎は教え子、山宮 允<sup>さんぐうまこと</sup>とは大正三年三木露風創刊の反自然主義的季刊文芸誌『未来』以来交友があった。また、『早稲田文学』を通じて川路柳虹、堀口大学、日夏耿之介と親交があった。日夏は同人誌『仮面』（大正二年）を主宰し、西條もその同人となり、後に日夏は早稲田大学英文科の教員となって、西條とは特に親しい関係にあり、これら西條の交友が西川満との交流にも重なっていくことになる。火野葦平と中山省三郎との関係については前号で述べたが、更に飯田蛇笏、宇野浩二、佐藤一英、寺崎浩、土岐善麿、丹羽文雄、横光利一、吉井勇等の早稲田大学出身者との繋がりも、西條あるいは山内義雄か吉江喬松という三人の恩師によって紹介されたと推測される。

第三は、早稲田大学卒業後歸台して、昭和九年一月に『台日』社に職を得た後に、知己となり、また親交を深めた文芸家たちである。西川満は、『台日』社に勤めるかたわら、大正町の自宅に媽祖書房を興して三百部限定の文芸誌『媽祖』（昭和九年一月創刊、同一三年三月に第一六冊を発行して意図的に終刊）を発行し、また処女詩集ともいえる『媽祖祭』（昭和一年四月）を三百部の限定で出版した。西川満は戦前の台湾で媽祖書房やその後進である日孝山房から数々の美麗な限定本を出版したが、七五部限定のものが多かった。これは「真の読者は七五人居れば充分だ」という西川満独自の考えに沿った部数であった。従って限定三百部は西川満の戦前の限定本としては大部数に数えられるのである。そして、三百部あるいは三百部限定の過半は「内地」の文芸家に贈呈されたのである。たとえば、上記『媽祖祭』の贈呈等を通じて伊良子清白、新村出、恩地孝四郎（版画家・装幀家）、川上澄生、木下杢太郎、川西英（版画家）等と親交を深めていった。西川満が造ったこの装幀・内容共に台湾的色彩られた限定本は、空前のものであった。しかし、当時の台湾の文芸家にその価値を知らしめることは容易ではなかった。そこで、西川満は先ず「内地」の著名な文芸家に、それらを贈呈して「内地」文壇の注目を集めた上で、台湾の文芸家たちにその評価を示し、台湾文芸勃興の一助にしようと考えたのである。そして、著書贈呈に対する「内地」文芸家からの礼状を、その反響として『媽祖』等に「諸家断墨」等と題して掲載した。以下、『媽祖』第六冊（昭和一年九月）から、二三例を挙げよう。

台湾は小生旧樓の地丁度台中に六年半台北に三年半十年の歲月は半ば故郷の心持ちさへいたしてをります。これより後惜みつつ、貴作ゆるゆる拝見したいと存知てみます。ただ一わたり拝誦いたしたところ、頽唐思想と異国情調といはんは事たりたり、靈玄にして幽暗、而して激越にして哀韻、之を盛るに七彩絢爛の措辞を以てす、寔に一あつて二なき希有の珍品傑品と拝見いたしました。何卒御健在でこの後とも日本詩壇のため御活躍を祈つてやみません。（伊良子清白）

殊に装幀紙質印刷にも意を尽され誠に見事なる本にて御力尽しの程推察に不堪候。南方台地の風土色あざやかに現はれをり内容と相俟ちて感賞に適候。（新村出）

台湾趣味横溢装幀おもしろく、於戲頽唐已下の詩集とりとりに興趣ふかく拝誦仕候今後とも御精

進のほど祈上候何れ何かの機会に昨年より受領せる詩集中よろしき品品とりまとめて御紹介申す所存、但し病中の気まぐれ者故いつとは定めかね候。(日夏耿之介)

詩集『孔雀船』(明治三九年)で在台経験もある著名な伊良子清白は、西川満の最も敬愛する詩人であり、後に『媽祖』第一四冊では特輯をしている程である。その『孔雀船』は、日夏耿之介、北原白秋、西條八十の絶賛を得て昭和四年に再刊されている。新村出は、言語学の権威。京大教授で、文学博士、昭和三年には学士院会員となっている。勿論、日夏も前述したように師・西條八十の同僚で著名な詩人であった。そして、『媽祖』のこの号には、この三名以外にも「協会」の「賛助員」には名を列ねていないが、室尾犀星、萩原朔太郎、西脇順三郎等の著名詩人も讃辞を寄せている。勿論寄贈に対する讃辞なのだから、そこには当然西川満及び『媽祖』に対する世辞や過褒も含まれていたであろうが、このような著名作家の讃辞の掲載は、「外地」台湾の文芸誌『媽祖』が、「内地」の文壇にも通用する内容であることを「内地」の文芸家は勿論、それ以上に台湾の文芸家 殊に日本文芸家にインパクトを与えたであろう。因みに台湾ではほとんど入手不可能な戦前の西川満出版限定本が、現在しばしば日本の古書店や古書目録に出るのは、以上のように「内地」の諸家に贈ったものが市場に出廻るからである。

また、西川満は、入社した『台日』社で、学芸部に属し全面的に文芸関係記事を担当、入社とほぼ同時に『台日』紙上で途絶していた学芸欄を復活させ、学芸欄充実のために内外の文芸記事や文芸作品、評論、紹介等を精力的に執筆した。また、早稲田の恩師を始め、早稲田時代に知己となった「内地」の文芸家たちに寄稿を求めると共に、台湾の文芸家の作品も掲載して彼らとも交友を深めていった。それと同時に『台日』社唯一の文芸記者として、「内地」から台湾を訪れる文芸家と面識をもつようになった。たとえば、昭和一三年一月四日の『台日』には「ペン部隊の六氏福田海軍武官を訪問」と題して、次のような記事が載っている。

南支那派遣軍への海軍従軍ペン部隊の長谷川伸、土師清二、湊邦三、中村武羅夫、甲賀三郎、関口次郎の一行六氏は二日午後南部視察を終へて来北したが三日は午前十一時西川本社記者の案内で海軍武官室に福田武官を訪問 挨拶をなし市内見物の後更に板橋の林家庭園を見物した

昭和一三年八月一三日、内閣情報部の要請で、武漢攻略戦視察のために菊池寛、久米正雄、佐藤春夫、林芙美子等二二名の「ペン部隊」(軍宣伝部隊)が初めて編成され、同年九月一二日に陸軍班・海軍班に分かれて現地に向かった。十月の帰国後、作家たちはその見聞を続々と各誌に発表し、反響を呼んだ。そこで、一十一月一日、海軍省が独自に南支派遣従軍ペン部隊を結成することにした。部隊は文芸家一五名よりなり、二班に分かれて広東に向かった<sup>9)</sup>。その中の上記記事中の一班六名が「内地」への帰途、台湾に寄ったのである。その世話をしたのが『台日』社の西川満であり、西川満は長谷川伸等が「内地」へ帰還するまで面倒をみたようで、台北駅まで見送りに行っている<sup>10)</sup>。そして、その後も西川満は同様に「内地」の著名文芸家訪台の折りには、その殆どと親交を暖めたようで、また訪台する「内地」文芸家も『台日』の西川満に面会を求めようになった。

余談であるが、これら「賛助員」として西川満と知り合った文芸家たちは、終戦後無一物で「内地」に引き揚げて来た西川満の力となった。たとえば、阿佐ヶ谷の引き揚げ寮では生活面で中山省三郎の世話になり、また、帰国後の昭和二年五月に八雲書店から『西遊記・百花の巻』を出

版し、それが西川満の戦後の生活に希望を与えるのだが、それを仲介したのも中山省三郎である。そして、『西遊記』の装画と挿絵を描いたのは、これも「賛助員」だった版画家の川西英であった。また、画家の恩地孝四郎は荻窪の富岳本社が日本愛書会を設立するから編集長にと誘ってくれた。そして、戦後の西川満に大衆作家として自立を促したのが、台湾で親交を深めた長谷川伸主宰の「新鷹会」への参加等であった<sup>11)</sup>。

この他には、どのような関係で「賛助員」名簿に名があがっているのか分からない文芸家もいるし、また、台湾在住の西川満以外の関係から「賛助員」になった作家もいた。たとえば、児童文学者の与田準一は、西條八十の知人であったが、「普通会员」で台湾在住の石田道雄とも関係が深く、おそらく石田の関係から「賛助員」になったと思われる。また、岡崎義恵と小宮豊隆は、濱田隼雄の東北帝大在学中の恩師という関係で「賛助員」となったのではないかと推測できる<sup>12)</sup>。しかし、以上に見たように、「賛助員」となった「内地」の文芸家の過半は、西川満との関係で名簿に名を列ねたと考えられるのである。

それでは、「協会」の設立と機関誌『文芸台湾』の刊行に対して、何故これほどまでに大量の「賛助員」の動員が必要であったのだろうか。

まず第一の理由は、台湾文壇の「内地」文壇での認知にある。それも一部の文芸家だけではなく「内地」の著名文芸家大方の認知が必要であったのだ。西川満は、早稲田を卒業するに当たって台湾に帰るか東京に残るか大いに迷った。しかし、恩師の吉江喬松から「地方主義文学のために一生をささげよ」との教示と「南方は／光りの源／我々に秩序と／歓喜と／華麗とを／与へる」という別辞を受けて、台湾に帰る決意を固めたのである。その後、『台日』社に入社し、学芸欄の充実を図る一方で、台湾愛書会（注17参照）に入り『愛書』の編集と台湾史料の蒐集、台湾色を全面に出した詩集『媽祖祭』の刊行や文芸誌『媽祖』及び『台湾風土記』（全四冊）の発行に力を集中してきた。そして、西川満の造ったこれらの詩集や雑誌は、いずれもかなり凝った装幀（西川満の言葉でいえば「装本」）となっている。これは勿論西川満自身の嗜好が産み出したものである。しかし、それが日本の辺境、「外地」台湾から「内地」文芸家に贈られた時には、その辺境の美がそれら文芸家の眼を大いに引いたのである。そして、頁を紐解いた彼らは、それまで意識もしなかった「外地」台湾にも文化や文学があることを認識した。これらの詩集や雑誌は、西川満の私的な刊行物ではあったが、「内地」文芸家の反応は、西川満にとっては充分なものであった。つまり、西川満は自ら出版・発行した詩集や雑誌の内容及び外形の芸術性を、先ず「内地」文芸家に認知させた上で、更に台湾の文芸家を糾合した「協会」及び機関誌『文芸台湾』をも認知させようとしたのである。これは、台湾の文芸が台湾という限定された一地方の中でのみ完結するのではなく、台湾という個性をもった「地方主義文学」が、中央の文壇にも伍する個性と特色をもっているという西川満の自負でもあり、また、これが恩師吉江喬松に課せられた彼の「地方主義文学」の顕現でもあった。

第二の理由は、台湾の文芸家に対して奮起と気魄を与えるためである。

昭和一四年五月二日『台湾時報』第二三四号に、鬼谷子「文芸時評 気魄の貧困」という一文が掲載されている。「鬼谷子」とは、西川満の筆名である<sup>13)</sup>。その中に、以下のような一文がある。

「台湾に文芸なし」と悪口云はれるのは、つまり大言壮語する割には何も仕事をしない作家、乃至してはめてもただ一人よがりやつてゐる作家が多いからである。絵を描かない画家、詩を作

らない詩人　と云つた言葉は、象徴としては面白いが、現実としては悲劇である。／ところが！台湾には、詩を作らない詩人、小説を書かない小説家があるのである。そして彼等は、第三者が彼等を詩人乃至小説家とみとめない、怒り出すのである。(略)／つまり、喫茶店やカフェを歩きまはつて、人の悪口をボソボソ呟くことにより、自らのエラサを第三者に認めさせようとはするが、手がないから作品は書かないのである。／これでよいのであろうか。真実これでよいのであろうか。領台以来幾星霜。つとに南方独自の芸術の開花を見るべきであるのに、今もつて冬眠をむさぼり、安逸にふけり、退却に次ぐ退陣を以てし、台湾に文芸美術なし　などと云はしめ、しかも尚、昼となく夜となく、自のエラサを自ら認めることのみによつて、僅かに慰めてみようとは。／試みに指を屈してみよ。今日真に見るべき文芸雑誌が一冊でも存在するか。読むにたへる小説集が一冊でも出版されてゐるか。あるはただ倦くことなき疑心猜疑であり、羨望嫉視であり、排他孤高である。何ぞ、それ悲しきや。／かかる事態を、かくの如く露骨に呈示されて、しかも何等、反感も共鳴も感じない程台湾の文化人は眠つてゐるのであろうか。豚の如く、水牛の如く。土まんどゆうの墓の如く。もし然りとせば、我また何をか云はんや。一杯の珈琲に島幻の夢でもむさぼるがよろしい。／然し、私はさうは思ひたくない。この苦言に憤慨して欲しい。憤慨して、何糞！と云ふはねかへすだけの気魄をもつて欲しい。罵詈雑言ではなく、作品で以て反撥して欲しい。そして、このことは決して不能ではないと私は信ずる。／素質はあるのだ。素質は十分にあるのだ。気魄に欠けてゐるのだ。感情は燃え立つてもそれを持続してゆく忍耐力に欠けてゐるのだ。この際、生気を吹き込め。満身の力を以て起ち上れ、右や左を見廻す必要はない(略)。／先づ書け。先づ書くことだ。この道を切り拓け。イスムをして先行せしめるな。小説を、歌を、戯曲を、詩を。つまり作品を書け。生命をかけて。～

昭和一二年四月一日、『台日』を始めとする台湾の新聞は中国語の掲載を自粛した。同年六月には楊逵主宰の『台湾新文学』が停刊して、台湾の文芸界は沈滞期を迎える。『台湾公論』第三巻第一号(昭和一三年一月)には柳川浪花「淋しき昭和十二年の本島文芸界」という一文があり、昭和一二年当時の台湾文芸界について沈滞した状況を語っているが、翌一三年及び一四年もそのような状況が続いた。この時期の数少ない作品の主なものには、単行本としては阿Q之弟作・張文環漢訳『可憐の仇人』(昭和一三年六月)新聞連載小説では王昶雄「淡水河の漣」(昭和一四年八月～九月、『台湾新民報』)と龍瑛宗「趙夫人の戯画」(同前年九月～一月)が挙げられるが、共に台湾人作家の作品であり、日本人作家の作品で目に付く作品はほとんどない。但し、ただ一人西川満だけが多くの作品を発表していたのである。たとえば、『台湾婦人界』に長篇小説「轟々と流れるもの」と「華嚴」を連載し、自編の『媽祖』に小説「梨花夫人」「歌ごゑ」等を掲載し、『台日』には多くの評論や書評等を書き、「内地」の詩誌『椎の木』や『文芸汎論』には詩を寄稿し、台湾色の濃厚な詩集『亞片』や『絵本桃太郎』、『傘仙人』のような児童詩画集や童話を美しい装幀の限定版で出版して「内地」においても反響を得て<sup>64)</sup>、他にも『愛書』の編集や『媽祖便』、『桐の手紙』という書誌パンフレットの編集発行、そして昭和一三年五月には「文芸汎論・詩業・功労賞」の授与等等である。鬼谷子西川満が以上の文章を書いた頃は、丁度このような時期であった。西川満は自身が台湾の文芸を支えているという自負心に満ちていたであろう。また、それ故台湾の文芸界の沈滞には不満を持ち、いらだつたのであろう。この一文は、誰に向けられた批判在台灣日本人左翼文芸家、俳壇や歌壇、台湾人文芸家　なのかは具体的には解らない。前号で言及した「台湾文芸界の展望」では台湾の文芸家を褒め称えたが、五ヶ月を経た筆名のこの一文で

は、彼らへのいらだちを噴出させている。このいらだちがこそが、後に「主義主張のちがう小説家の間がどうにもまとまらず、短気なわたしは、それなら一足さきに詩人だけでも」と考えた結果「台湾詩人協会」設立となり、詩誌『華麗島』の発刊となるのである。そして、台湾の文芸家を更に奮起させ上質の作品を書かせるためにも、また読者の拡大を図るためにも「内地」文芸家の協力、つまり中央文壇の注視が必要なのであった。西川満の盟友であった島田謹二も、次のように述べている<sup>18)</sup>。

(台湾の)作品が中央の読書界を動かして日本全国に知られるといふことは、勿論その作品の文芸的出来栄えにもよらうが、現在のところでは一種の奇蹟に属するとせねばならぬ。勿論、中央の一角に足がかりを得ることは出来る。これは諸外国の所謂外地文学を見ても大抵同じ事である。即ち外地そのものでは、殆んどその文学はみとめられず、内地の中央文壇を動かしてそこに足がかりを得、その後で外地の読者層へ浸入して行く。われわれはそれと同じことを、例へば、雑誌「媽祖」のやうなものについて、確かめることが出来た。(傍点筆者、以下同じ)

その後も西川満は、しばしば「賛助員」を始めとする「内地」文芸家を「諸家芳信」として、『文芸台湾』誌上に登場させる。つまり、「内地」の「賛助員」たる文芸家は、台湾文芸界の一体化と向上に資する役割を担っていたのである。

### 三、西川満と島内文芸家

さて、「内地」の「賛助員」に対して、台湾在住の「会員」は、「賛助会員」と「普通会员」に分けられる。『文芸台湾』第三号に添付された「内報・参」の「会員名簿 台湾の部」には、「賛助会員」二九名及び「普通会员」六二名が列記されている。「賛助会員」及び「普通会员」は、以下の通りである。

[ 賛助会員 ] 安藤正次、飯沼龍遠、石黒魯平、植松安、大沢貞吉、金関丈夫、神田喜一郎、草薙晋、国府種武、小林土志朗、佐伯秀章、島田昌勢、島田謹二、鈴木巖、世良寿男、府図書館、田淵武吉、塚越正光、富永豊文、中村喜代三、西岡英夫、早阪一郎、樋詰正治、宮本延人、森田正雄、矢野峰人、山中樵、山本孕江、鄭津梁

[ 普通会员 ] \* 赤松孝彦、飯田実雄、\* 池田敏雄、石田道雄、糸数正雄、王育霖、王碧蕉、大賀湘雲、郭水潭、川合三良、川平朝申、木皿正一、喜多邦夫、\* 北原政吉、好美庄助、邱淳洸、邱炳南、桑田喜好、久保田明之、\* 黄得時、吳新荣、境暢雄、周金波、洪山春樹、莊培初、\* 高橋比呂美、\* 竹内実治、立石鉄臣、田中清汾、千葉正美、張文環、土屋宝潤、中井淳、中里如水、中島俊男、\* 中山侑、\* 長崎浩、長野浩、長野泰、名島真、西川史郎、\* 西川満、新垣宏一、新田淳、濱田隼雄、日野原孝治、古川義光、本田晴光、槇ツユ、松井奈駕雄、万造寺龍、万波おしえ、水蔭萍、宮田弥太郎、村田義清、山口充一、楊雲萍、横田太郎、藍陰鼎、\* 龍瑛宗、林精鏐、林夢龍、林熊生 ( \* 印は、『文芸台湾』編輯委員 )

これら「賛助会員」については、すでに河原功氏が、四つのグループに分けて説明している。



以下、若干の補足を加えて、そのグループについて見ることにする<sup>66</sup>。

第一のグループは台北帝大を中心にした教育関係者で、安藤正次、飯沼龍遠、植松安、神田喜一郎、世良寿男、中村喜代三、矢野峰人は台北帝大文政学部教授、宮本延人は同助手、金関丈夫は医学部教授、早阪一郎は理農学部教授、佐伯秀章は同助教授、島田謹二は台北帝大講師で台北高等学校教授、石黒魯平は台北高等学校教諭、国府種武は台北第一師範付属小学校主事、田淵武吉は同訓導、森田政雄は台北第二高女教諭。

第二のグループは、高踏法院覆審部判官の草薙晋、文教局長の島田昌勢、総督府図書館長の山中樵という総督府高級官吏。

第三のグループは、植松安、神田喜一郎、島田謹二、矢野峰人、草薙晋、山中樵、西川満、大沢貞吉（『台日』社の西川満の上司）等、「台湾愛書会」<sup>67</sup>のメンバーで、上記の第一・第二グループの人々と重なっている。

第四のグループは、日本の伝統文芸家の主宰者グループで、歌誌『あらたま』の樋詰正治（医師）同『原生林』の田淵武吉、当時高雄中学校の教諭で春田操が創刊した歌誌『紅樹』を引き継いだ（後に該誌は『南台短歌』と改題）小林土志朗（本名・敏郎）句誌『ゆうかり』の山本孕江、川柳誌『国姓爺』の塚越正光である。

その他、西岡英夫（号は塘翠）は、台湾製塩常務取締役で児童文学研究家、鈴木巖と富永豊文は『台日』社員である。

以上いずれのグループも河原功氏が指摘するように西川満との関係で、「賛助会員」に名を列ねたと考えられる。いずれも年齢的にも西川満等「普通会员」よりは年上であり、社会的地位もあり、いわば「協会」の顧問格ともいえるが、実際には、「賛助会員」の役割とはどのようなものだったのだろうか。東方版『文芸台湾』第四号に添付された「協会・会規」の「附則」には「賛助会員」を「本会の主旨に賛し、精神的に又は物質的に本会を支持するもの」とあるが、これのみでは、「賛助会員」の明確な位置づけは不明である。しかし、前掲の西川満「南方の烽火」には、「賛助会員」と「普通会员」について、次のような説明がある。

協会本来の目的が、文化の向上と会員の親睦にあるは論をまたない。従つて文化の向上を目指すためには、従来綜合誌の育ちにくい台湾の特殊事情に鑑みて、協会が自ら文芸雑誌を刊行する必要があるのである。ところが一面この事たるや、会費その他の点から、に雑誌を持つ歴史古き各種結社同人乃至文芸愛好家であり乍ら 文筆人等の参加を、かへつてとどめる結果ともなる。ここに於て、その両者を生かすために、この度結成されむとする台湾文芸家協会は、前者を普通会员、後者を賛助会員となし、後者を会費から切離し、内地文人の歓迎、文化事業の経費に対しては、普通賛助の区別なく、等しく「会員」の名の下に一致して仕事をすすめてゆく仕儀にしたのである。（ は文字不明）

この一節は、不読箇所もあり且つ文意の通じない部分もあるが、以下のようにまとめることができると思う。「協会」は、台湾全体の文芸家の親睦団体である。そのためにはすべての文芸も包含した綜合文芸誌が機関誌として必要である。しかし、すでに古くから個別に機関誌をもつ文芸結社所属の会員 ここでは『あらたま』や『ゆうかり』等のような歌誌や句誌に所属する文芸家を指す は、会費の二重払い等で負担が大きい。そこで、彼等を「賛助会員」として、「賛助会員」からは「協会」の会費は徴収しないことにして、「普通会员」と「賛助会員」を区別した、

ということであろう<sup>18)</sup>。

しかし、ここで注目したいのは、「歴史古き各種結社同人」中、俳句や短歌等の伝統文芸家グループの代表が、すべて「賛助会員」となっており「普通会员」には、このような伝統文学の文芸家が全く見当たらないことである。勿論、児童文学家の山口充一（総督府文教局属兼編修書記）や小説家の新垣宏一（台南第二高等女学校教諭）が「あらたま」の会員であるとの例はあるが、俳句や短歌等の純然たる伝統文学からの「普通会员」がいないことは、奇異である。「賛助会員」は、それぞれ社会的地位もあり、文芸経歴も古い人々、年齢的には富永豊文の四歳が最も若く、最年長の西岡英夫は六代である。「普通会员」は、台北高等学校の邱炳南（永漢）が最も若くて一六歳、後は概ね二代三代である。その年齢で俳句や短歌の結社に属してしていたものがいたはずだが、「普通会员」にはいないのである。確かに前述の「台湾詩人協会」設立の経緯から考えても、西川満の意図は、詩人と小説家を主体とした団体の設立を念頭に置いていたことは間違いない。しかし、「協会」の「会規第二条」には、「本協会は台湾に於ける文芸の向上発展並に会員相互の親睦を図るを以て目的とす」とその主旨が述べられており、「第四条」には「本協会は台湾在住並に台湾出身の文芸家にして本協会の主旨に賛成せるものを以て会員となす」とあって、とくに伝統文学は除くとはない。先に掲げた西川満の「南方の烽火」にも、以下のようにある。

尚従来、台湾には文化方面の雑誌が余りにも少く、書誌の「愛書」、短歌の「あらたま」「原生林」、俳句の「ゆうかり」、民俗の「台湾風土記」、詩の「華麗島」「荒地」及び学校関係の「台大文学」「翔風」等がその主なものであつたが、歳末塚越正光氏の川柳誌「国姓爺」が生まれ、更に明春を期して各誌の合同により協会編纂となる「文芸台湾」と並んで別に短歌中心の「台湾」大衆性豊かな「台湾芸術」が一斉に創刊されるは、当然その間の連絡育成の掌に当るべき台湾文芸家協会としても、大きな喜びであるし、台湾のためにも意義あることと思ふ。

また、『文芸台湾』が創刊発行される直前の『台日』に、次の様な記事が出ている<sup>19)</sup>。

（『文芸台湾』の）内容は、～（中略）～詩・評論・歌・俳句・川柳・漢詩・民俗・絵画・版画等文芸各界にわたつて編纂され、しかもその全部が在台文芸家であつて、東京方面文人の執筆が一名もないことはやうやく『台湾』が文芸の水準に達した姿を思はせるものさへあり、従来のとかく東京文壇尊重の弊風が、今後かうした行き方によつて打破されることであらう。

この記事も無署名だが、当時の学芸部長であつた西川満の執筆したものである（西川満直話）。つまり、これらの記述から『文芸台湾』は、「各誌の合同により協会編纂となる」機関誌であつて、短歌・俳句・川柳・漢詩などの伝統文芸をも含んだ総合文芸誌を意図していたことが解る。当然その母体である「協会」の会員も、それらの文芸家を含む構成とならなければならない。これらの伝統文学について、『文芸台湾』創刊号を見ると、短歌では樋詰正治「番地ライ社」七首、田淵武吉「春宵寂寥」十首、俳句では塚越正光「句帖より」七句、山本孕江「蘭陽」一句、漢詩では黄得時「脈々」七絶五首が掲載されており、第二号（昭和一五年三月一日）には、短歌・洪山春樹「まはれ独楽」八首、高平敏夫「死の幻覚」七首、俳句・古賀山青「安通温泉行」八句、藤田芳仲「ひばり」一句、漢詩・神田鬯盤「絶句二首」、黄得時「香夢」七絶六首が掲載されている。ところが、第三号（五月一日）になると、小林士志朗の短歌「頽廢の街」八首のみが掲載さ

れているだけで、それ以降は伝統文学の掲載は、ほぼなくなってしまうのである。何故、このような事態になってしまったのか。

前号でも述べたように昭和二年四月に、「内地」の短歌総合誌『日本短歌』の編集者・斉藤勇が台北第二師範学校の教諭として来台した。それを期に昭和一三年一月、それまでそれぞれの短歌結社と機関誌という派閥にしがみつき対峙してきた歌人たちが、交流の場として「台湾歌人倶楽部」を結成した。台湾の歌人の大同団結である。そして「協会」が成立し『文芸台湾』が創刊された四ヶ月後の四月五日に、「台湾歌人倶楽部」を礎として台湾歌人の交流歌誌 四六判一四頁の堂々たる『台湾』創刊号が発行されるのである（因みに『文芸台湾』創刊号は、五六頁）。つまり、『文芸台湾』創刊時は、歌人には自らの属する結社と機関誌があり、且つ結社間の交流の場として「台湾歌人倶楽部」があり、更にそれを基盤として台湾歌人全体の総合交流歌誌『台湾』が創刊の途次であったのである。このような事情を勘案すれば、歌人たちが更に積極的に「協会」へ参加し且つ『文芸台湾』に寄稿するという状況は、生まれにくかったと言える。俳句については、山本孕江主宰の句誌『ゆうかり』を中心とする「ゆうかり派」の俳人が四五人<sup>23</sup>と台湾俳壇のほぼ八割を占めており、山本孕江が台湾俳壇に君臨しており、その影響下にある俳人たちが個別に「協会」や『文芸台湾』に参加することは難しかったようである。というよりは、領台以来の伝統を誇る歌壇俳壇のほうで、新進で詩人・小説家を中心とした新文学とは一線を画したとといったほうがよい、と考えたのかもしれない。

西川満は『文芸台湾』の前身誌である詩誌『華麗島』発刊に関して「沈滞しているこの台湾に、一大文芸活動を展開したいと思い、詩人、小説家の仲間呼びかけたのだが、主義主張のちがう小説家がどうにもまとまらず、短気なわたしは、それなら一足さきに詩人だけでも、と仲のよい北原政吉君と語らって、台湾詩人協会を結成、発会式をおこない、三箇月かかって、刊出したのである。～「華麗島」は一号雑誌なのだ。というのは、この創刊号を見た小説家が仰天し、詩人がこんなに集まるのなら、自分たちも、と提携を申し込んできたからだ。わたしはいさぎよく台湾詩人協会を発展的に解消し、台湾文芸家協会を設立することに協力したのである<sup>24</sup>と回顧しているが、その小説家以上に歌人や俳人は、西川満にとってまとまりにくい人々であったのだろう。おそらく、このような歌壇及び俳壇の状況を西川満は十分に承知していた。そこで、歌壇や俳壇の長老格を顧問格である「賛助会員」に加えて敬して遠ざけ、一応は台湾全島の文芸家を包含する「協会」としての形を整えたといえる。故に、台湾歌人の総合歌誌『台湾』が出た四月に、「協会」はその文芸の方針を「小説」と「詩」に集約するのである。それは、昭和一五年四月一二日の『台日』の、次の記事で明確に解る<sup>25</sup>。

台湾文芸家協会では、去る十日夜の春季研鑽会に於て、在北会員の総意により、協会内に小説と詩との研究会をそれぞれ別個に形成、独善自尊安住の積弊を徹底的に打破活発な運動を展開することになった

小説研究会 テキストを使用しての小説研究、会員の創作研鑽、講師による文学教養を实行、第一回は島田謹二氏の『仏蘭西に於ける外地小説の内容とその作品価値』なる講義ある筈、幹事は濱田隼雄氏に決定

詩の研究会 会員の詩作品の朗読、研究、現詩壇との交流研討を中心とし、対外的には毎年年刊『華麗島詩集』を刊行する、第一回は西川満氏の『仏蘭西ロマンチズム・パルナシズムの詩人と詩作品について』なる研究発表ある予定、尚幹事は北原政吉氏に決定

以上のように台北在住の「協会」会員により、「協会」は特に小説と詩の研究会に力を入れることになった。これはとりもなおさず『文芸台湾』掲載の作品向上のためであったのだろうが、「協会」の機関誌であったはずの該誌が、次第に「協会」とは離れた存在になりつつあったことをも示している。それが明確に現れるのは、七月のことである。東方版『文芸台湾』第四号（昭和十五年七月一日）に添付された「会報・壹」に『文芸台湾』は、協会の事業部に属する一部門ではありますが、現時、その必要性を益々痛感致しますので、基礎を強固にするため、七月より同人制<sup>23</sup>を施行致します。～/今後『文芸台湾』に発表する作品は必ず研究会によつて推敲通過せるもののみを発表してゆく旨編輯委員会より通告がありました」とある。『文芸台湾』は「協会」の機関誌であり、元来は「普通会员」から編輯委員が選ばれて運営をしていたはずである。「協会」会員の会費は半年で二円であったが、『文芸台湾』の同人からは月二円の同人費（注23参照）を徴収して運営を強化しようというのである。また、「協会」の「細則」に拠れば、「会員は『文芸台湾』に寄稿の自由を有す（但し、採否は編輯委員に一任のこと）」とあるのに、上記の小説あるいは詩の研究会で認められなければ掲載はされないことになった。ここにおいて『文芸台湾』は、詩と小説専門の文芸誌となったのである。そして、『文芸台湾』の上部組織であるはずの「協会」は名目のみとなり、「普通会员」のほとんどは『文芸台湾』の同人<sup>24</sup>となり、短期間ではあるが『文芸台湾』が台湾唯一の新文学文芸誌として台湾文壇をリードすることになる。

以上のように、「賛助会員」とは、『文芸台湾』の台湾における認知のために設けられた会員ということになるだろう。西川満は『媽祖』や『台湾風土記』等の雑誌を編集発行して「内地」の文芸家からはそれなりの賞賛を得た。しかし、在台の文芸家からの反応は鈍かった。故に詩誌『華麗島』の発行に際しては、詩人以外の文芸家は興味を示さなかった。この轍を踏まぬためにも、『文芸台湾』創刊に当たっては「内地」文芸家の認知はもとより、台湾の文芸家の認知も必要であった。そこで、先ず台湾の文芸研究の権威である台北帝大の教授たち、そして、台湾の日本文芸家が台湾での生活のために何らかの形で関わっていた総督府の官吏たちを「協会」の「賛助会員」とした。更に、台湾文壇の伝統文学の長老たちをも、それら「権威者」の中に押し込み、西川満等の若輩はすべて「普通会员」として、『文芸台湾』の運営実務に携わったといえる。そして、『文芸台湾』は、西川満の所期の目的である詩と小説中心の雑誌へと脱皮していった。

#### 四、西川満の目指したもの

以上のように、西川満は「賛助員」として「内地」の文芸家を効果的に配置し、島内の有力文芸家を「賛助会員」として奉り、「普通会员」中の編輯委員を中心に『文芸台湾』の運営に邁進した。そして「協会」の機関誌であるはずの『文芸台湾』は、西川満を求心力として「協会」を凌駕した存在となり、自然「協会」の機能は薄まっていった。その『文芸台湾』において、西川満は台湾独自の「地方主義文学」の確立を目指すのである。それでは西川満は、『文芸台湾』においてどのような「地方主義文学」を実践していこうとしたのだろうか。

黄得時の「台湾文壇建設論」（昭和一六年九月一日『台湾文学』第一巻第二号）には、次のような一節がある。

現在、台湾で文学をやつてゐる人々を見るに、大体、二つの型に分けることができる。一つは、中央文壇に進出せんがため、台湾を踏台とするものと、中央文壇を全然顧慮に入れず、専ら台湾

で独自の文壇を建設してその中で作家が作品を発表して自ら楽しみと同時に、台湾全般の文化の向上発展を計らうとの二つがある。～ノ一体、中央文壇に進出せむがため、種々あせつてゐる人々は、中央の好奇心を買ふことに汲々して、台湾の現実の中にしつかりと腰を据ゑ、必要に応じては、現実の中に躍り込んで血みどろな闘ひを試み、その中から文学的な何ものかを掴まうといふことを故意に避け、中央に認めさへすれば、或は中央の人々の目を誤魔化しさへすれば、といふ意図のもとにエキゾチックなものばかりを素材を選んで作品を書くのである。だからさういふ作品は、台湾の事情を全然知らない内地に人々には、なるほど面白く読まれるかも知れぬが、台湾にある吾々には、何んのことかさっぱり判らない。ノしかもさういふ人に限つて、唯我独尊に陥り易く、自分一人さへ出世すれば、後の者はどうでもいゝといふ態度を取るものである。ノ～エキゾチックなもの、例へば紅色をした廟の屋根とか、城隍爺の祭りとか、媽祖の祭典とか、いふやうなものを多く素材に選んだため、見た目には非常に美しく珍しいが、ぐつと胸を打つて来る底力が比較的少い。

黄得時のこの一節は、台湾人作家と日本人作家を対比的にとらえ、具体的に作家の名には触れていないが、西川満を「中央文壇に進出せむがため」の文芸と批判したものである。現在では、西川満に対するこのような見解が一般化しており、たとえば現在の台湾文学研究を担う新進の研究者柳書琴も、この一節に基づいて「～論調の中には西川満らの芸術至上主義を規範とし中央文壇進出をめざす人々に対する反感がみてとれる<sup>25</sup>」と述べている。では、西川満は、ほんとうに中央文壇進出を目指して文芸活動をしたのであろうか。前述したように、西川満は、早稲田を卒業するに当たって台湾に帰るか東京に残るか大いに迷った。しかし、恩師の吉江喬松から「地方主義文学のために一生をささげよ」との教示と「南方はノ光りの源ノ我々に秩序とノ歡喜とノ華麗とをノ与へる」という別辞を受けて、台湾に帰る決意を固めた。これは西川満にとっては、単に東京で職を得るか否かという問題だけではなく、詩人である彼にとっては中央文壇との訣別という、文芸家としての大きな決断であつた。故に「大いに迷った」のである。西川満は故郷・台湾に帰った。そこで、台湾という「内地」にも、他の「外地」にもない個性をもった文学の創始に邁進したのであって、西川満は「中央文壇進出」を目指したわけではなかつたのである。台北帝大の講師で、台北高校の教授であり西川満とは終生交友のあつた島田謹二も、次のように当時を回顧している<sup>26</sup>。

日本の文学というのは、いつもいつも東京が中心なのであります。東京の中でも、ある特定の文壇というものが、中心地なのであります。その文壇の中でも、特にある勢力を持った一種のクリークとヨーロッパ語では申しますが、そういうものの作っている少数の仲間がおりまして、その連中が賞めれば登録され、賞めねば永遠に門が閉ざされる、というようなあり方、登録されてその連中に認められた者だけが、世の中に出るのでありまして、極端にいうと、そういうのが、明治以来、約百年間の日本の文学の状況であります。それを世間では、文壇の文学、と申しているのです。ノ西川總裁は、はじめはそういうところ自ざしたに違ひないのでありますが、台湾へお出になりましてからは、全然それらとは生き方を異にする、いかにも独創的な、新しい、また總裁御自身のお人柄にふさわしい、ユニックな分野を、日本で最初に開拓なさいました。

また、西川満自身も「外地文学の奨励」(昭和一七年七月一日『新潮』七月号)の中で、次のよ

うに語っている。

実際、われわれは過去に於て、われわれの周囲から、頑強に文芸的存在を拒ばまれて来た。昭和十年頃、辛うじて中央文壇に多少の足がかりを得るに及んで、はじめて外地のきはめて一部の人から、それも消極的な共感を得たにすぎない。従つて若し、もつと多くの現地の人々の共感なり、支持なりを得るためには、皮肉な話だが、現地を相手にせずして、あくまで中央文壇のみを目標にしなければならないのである。～ / 然しこれは正しい外地文学の行き方ではないのである。勿論、同じ日本文学である以上、中央文壇と全く没交渉に存在し得るものでもなく、また長い伝統のある中央文壇の理解と支持なくしては、到底発達し得るものではないけれども、外地文学は、その本筋としては、やはり外地自体に於て独自の方向に発達してゆかなければならない。

この一節で、西川満が必ずしも「中央文壇進出」をのみ目指したわけではなく、台湾という日本の一地方における独自の文学の樹立を目指していたことが解り、黄得時の指摘とは大いに異なると言わねばならない。また、文中に「昭和十年頃、辛うじて中央文壇に多少の足がかりを得るに及んで、はじめて外地のきはめて一部の人から、それも消極的な共感を得たにすぎない」とあるが、面白いことに、この件は二重の意味でも読むことができる。一つは、昭和一年四月に西川満の処女詩集『媽祖祭』が出て、「内地」の文芸家から反応があり、また台湾の一部の文芸家である詩人から共感を得た、と読めるし、今一つは、この頃、楊逵、呂赫若、龍瑛宗<sup>26</sup>等の台湾人作家たちが、相次いで文学賞に当選等して中央文壇に進出、台湾でも注目されたことのようにも読める。となると、中央文壇に進出を望んだのは台湾人作家のほうではなかったのか、という読み方もできるのである。

最後に、再度「南方の烽火」を見ておく。

明治以来、この地に花咲いた文芸の業績については、台北帝大の松風子氏<sup>28</sup>が『華麗島文学志』の名の下に独自の研究を『台湾時報』その他に連載して居られ、それによつて大体を知悉し得るが、幾多文人の文芸を通じての台湾への貢献、努力に対して、われわれは感謝すると共に、更にこれを受けてよりよき高度の文芸の花を咲かせこれを育ててゆかねばならぬと確信する。しかるに現在、才能にめぐまれ乍ら、東京を離れてゐるが故に、発表機関なきが故に、いたづらに芽生えもせず埋もれてゆく人があつたとしたら、従つて台湾の文芸が何等進展しないとしたらわれわれは、折角踏石となつた先人に対し、はた将来のわれわれの後継者に対し、何の顔向けが出来よう。

日本の領台以降、台湾には「内地」から幾多の文人がやって来た。森鷗外、俳人の渡辺香墨、伊良子清白、岩谷莫哀、佐藤春夫等である。彼らはそれぞれのジャンルで台湾に関する作品を残した。西川満は、それら日本の領土であつた台湾を素材とした先人たちの文学を受け継ごうとしたのである。森鷗外以下の諸文芸家は、台湾を文学の材とはしたが、台湾を通り過ぎた旅人であつた。しかし、西川満は決して台湾を通り過ぎた旅人ではなかつた。故に西川満は、それら先人の遺業を受けて、台湾に根を持った台湾特有の「日本文学」を育てようとしたのである。これが、西川満の「地方主義文学」だったといえる。

おわりに

僅か二歳で台湾に渡った西川満にとって台湾は故郷であった。そこは大日本帝国の一地方それは異民族同居の特殊な地方ではあったが であり、西川満自身は植民地との認識は薄く、北海道人が本州等を「内地」と呼ぶような認識に近かった。彼はその故郷台湾で独自の「日本文学」を打ち立てようとした。それは中央文壇を目指す文学ではなく、中央と対峙できるような台湾という個性を内包した文学の確立であり、台湾における新たな「日本文学」の確立であった。それが、彼の師・吉江喬松から与えられた「地方主義文学に生きよ」との命題に対する答えだった。そのために、彼は、先ず己の文学活動を台湾という個性的な色に染めることから始めた。そして、台湾の色彩の濃い『媽祖』や『台湾風土記』、『媽祖祭』等の雑誌や作品を生み出し、それは「内地」の文芸家たちの注目をも集めた。それが西川満の文学に対する自身を大いに深めることになった。そこで、彼は当時沈滞していた台湾の文芸界の大同団結を図るべく文芸運動を始めた。しかし、互いに対立する小説家はまとまらず、とりあえず詩人を中心にした「台湾詩人協会」を設立した。そして、その機関誌『華麗島』の創刊にあたって、「内地」の著名作家を台湾文壇に引き入れた。火野葦平である。それが功を奏し、在台の小説家も協力を申し出て、それが「協会」の設立及び『文芸台湾』の創刊となった。更に西川満は、台湾の文芸家を一体化し、新たな文芸を勃興させるためには、「内地」文壇の台湾文芸への認知が重要であると考えた。そこで、「内地」の著名文芸家たちを「賛助員」という名目で、「協会」の名簿に列した。それはまた、台湾の文芸家を一体化し、文学的水準を高めるという役割をも意味していた。ただ「内地」では些か名を知られた西川満は、台湾においてまだその影響力はなかったので、台湾の文芸界をまとめるには、台湾の有力文芸家の認知も必要であった。西川満以前にも日本文芸家が作り出した新文学はあったが、しかし、それら左翼文芸や孤立した文芸は西川満の意図した文芸とは異なっていた。台湾人作家の文芸もまた、西川満の文芸観とは異なったものであった。更に、台湾には領台以来隠然とした勢力をもつ俳句と短歌の世界があり、それは新たに出発しようとする新文学に比べて圧倒的な力をもっていた。そこで、西川満は、台湾での公的権威である台北帝大を中心とする教授及び総督府系の官吏を「賛助会員」として、且つ伝統文学界の長老を「賛助会員」として迎えた。しかし、この頃、台湾の歌人たちは「台湾歌人倶楽部」を作りそれを基盤として台湾歌人の派閥の上に立った相互の交流の場として歌誌『台湾』を創刊した。また、俳壇も山本孕江を中心としてすでに一元化されていた。つまり、俳壇も歌壇も自ずから「協会」に対して一定の距離を置き、その独立を図ったのであった。しかし、それらは既に西川満の考えの中にあっただけだ。そこで、それを好機に「協会」及び『文芸台湾』を、小説と詩の掲載の場として、旗幟鮮明にしたのである。西川満の目的は「協会」の設立そのものにあっただけではなく、『文芸台湾』の創刊にあったと言える。単なる個人的な文芸誌の創刊は、西川満にとっては、既に『媽祖』及び『台湾風土記』で完結していたのである。台湾全土を網羅する文芸誌を創刊するためには、その前提として台湾の文芸家を網羅する「協会」が必要であった。新たに創刊された文芸誌『文芸台湾』こそが、領台以来の日本文芸家を受け継ぎ、更に新たな「地方主義文学」を生み出す場なのだと、西川満は考えたのである。

## 【注】

- (1) 西川満「南方の烽火 台湾文芸協会の結成」(昭和一四年一二月二日『台日』)
- (2) 台湾・東方文化書局一九八一年三月覆刻「台湾新文学雑誌叢刊」版『文芸台湾』第四号末尾に綴じ込まれた「台湾文芸家協会 会報・壹」の二頁に同会の「会規」があり、その「二」に「本協会は台湾に於ける文芸の向上発展竝に会員相互の親睦を図るを以て目的とす」とあり、西川満の言葉と一致する。
- (3) 『文芸台湾』第二号(昭和一五年三月一日)中の「展観と講演」及び昭和一四年一二月二八日・同年一五年一月一日『台日』に拠る。
- (4) 『文芸台湾』第二号(昭和一五年三月一日)中の「展観と講演」に拠る。
- (5) 『文芸台湾』第二号(昭和一五年三月一日)中の「展観と講演」及び同年一五年一月二日までの『台日』に拠る。
- (6) 『台日』昭和一五年八月一七日に拠れば、その放送内容の詳細は、以下の通り。氏名の挙がっているのは朗読者だと推定される。  
第一部「高砂族神話」(台北帝国大学言語学教室の採取になるパイワン族のもので会員の濱田隼雄が脚色、素朴な中にも愛情豊かな愉快な内容をもっている)  
一、サブラルヤルヤンの話(神話) 有賀文子  
一、白い石(神話) 萬波おしえ  
第二部「台湾民話」(龍山公学校六年黄氏鳳姿採取の「娶紙某」と西川満・池田敏雄採取の『首かへ・かまど神』)  
一、娶紙某(民話) 福田チカ子  
一、首かへ、かまど神 池田敏雄
- (7) 河原功「中国雑誌解題『文芸台湾』」(昭和五年二月『アジア経済資料月報』第一八六号)
- (8) 西條八十は童謡「かなりや」(大正七年『赤い鳥』一二月号)や高踏的象徴詩集『砂金』(大正八年、尚文堂)等で名を知られていたが、その一方当時大ヒットした流行歌「東京行進曲」(昭和四年、日活映画「東京行進曲」主題歌)「愛して頂戴」(昭和四年、松竹映画同名主題歌)「女給の唄」(昭和六年、帝キネ映画「女給」主題歌)「侍ニツボン」(昭和六年、日活映画同名主題歌)の作詞家として有名であった。後に日本中を席卷した「東京音頭」(昭和八年)や「旅の夜風」(昭和一三年、松竹映画「愛染かつら」主題歌)も西條の作詞である。ために流行歌の作詞家が大学教授ということで学内から批判があり、一時は早稲田の退職も考えたようであるが、その批判から西條を守ったのが学生時代からの恩師でもあり、当時早稲田の同僚でもあった吉江喬松(孤雁)であった。西川満は、昭和八年に早稲田を卒業するまで西條の教えを受けており、文芸的にその西條に傾倒し、その影響を色濃く受けている。因みに卒業論文は『アルチュル・ランボオ研究』で、主査は西條だった。昭和四二年一月には西條自身も中央公論社から七百頁余の大作『アルチュール・ランボオ研究』を上梓している。
- (9) 桜本富雄『文化人たちの大東亜戦争 PK 部隊が行く』(一九九三年七月一日青木書店)
- (10) この他にも昭和一三年一二月八日『台日』にも、「西川満」の署名入りで「ペン部隊の離台 駅頭で長谷川伸氏と語る」という一文が掲載され、また同日から三回に渡って(一日・二日)「海外ペン部隊勇士の座談会」が連載されている。
- (11) 西川満『わが越えし幾山河』(一九九一年六月六日人間の星社)
- (12) 伊藤英治編「まど・みちお年譜」(二年一月二日河出書房新社『文芸別冊・まど・みちお』)及び濱田淑子・河原功編「濱田隼雄年譜」(昭和五九年九月二日明窓社、後に訂正増補し「濱田隼雄著作年譜」と解題して、一九九八年七月二日緑蔭書房『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集 第四巻』に収録)。
- (13) 「鬼谷子」が、西川満の筆名であるということは、前号でも述べたが、以下もう少し詳細に述べておく。  
『文芸台湾』の巻末には、通常「あとがき」があるが、昭和一六年六月二日発行の『文芸台湾』第二巻第三号(通巻九号)の巻末は、「らくがきの頁」とあるだけで全面白紙である。その前月の五月二七日に張文環や中山侑等が『文芸台湾』から分離し、台湾人文芸家を中心に啓文社を興し、『台湾文学』を創刊したので、そのショックの大きさが西川満をしておそらく巻末頁を白紙にしたと思われる。そして『文芸台湾』同号には、西川満の詩「逢魔が時の歌」が掲載された。それは「鬼谷子」の「気魄の貧困」内の一節「つまり、喫茶店やカフェー



を歩きまはつて、人の悪口をボソボソ呟くことにより、自らのエラサを第三者に認めさせようとはするが、手がないから作品は書かないのである」という一文と内容が奇妙に合致していたので、生前、西川満氏に『台湾文学』の文芸家を批判したものが否かを尋ねたところ、それは「台中派」(『台湾新聞』の文芸部長であった田中保男をはじめとする人々)への非難であって『台湾文学』への非難ではないとの答えだった。その折りに「気魄の貧困」を発表した頃、『台日』に「列仙伝」を連載しており、その第一五・一六回(昭和一四年三月一四・一六日)に「鬼谷子」について記述したので、これを該文の筆名にしたとの教示を得た。この他にも、「気魄の貧困」の最初に「通りすがり旅の人が、それこそ通り一べんに台湾の上つ面だけを撫でて、台湾に見るべき文芸美術なし」という、昭和一四年四月一六日『台日』「文芸欄」所載の三巻春楓の「はがき随筆 一考を要す」からの引用があり、「鬼谷子」は、同文中でこれを批判している。「南方の烽火」の中でも「通りがかりの無責任な旅の人が『台湾に文芸なし』などと放言するのは～」とほとんど同様な言い回しが繰り返されていることや、「気魄の貧困」の中にフランスの作家フローベールがモーパッサンに送った手紙についての記述があること等が、「鬼谷子」=「西川満」の傍証になるだろう。

- (14) 黄野人「文芸時評 淡水と三つの小説」(昭和一四年八月一日『台湾時報』第二三六号)に拠れば、当時、西川満が出版した限定版雑誌『媽祖』や本文に挙げた限定本類は、「内地」の古書市場で、「内地」の有名作家の文芸書を遙かに凌駕する高値がつけられていた、とある。
- (15) 島田謹二「台湾に於けるわが文学 『華麗島文学志』エピローグ」(昭和一四年二月一三日『台湾時報』第二三一号)
- (16) 前掲注(7)の河原功「中国雑誌解題『文芸台湾』」、及び一九九七年二月二五日、日本図書センター『旧植民地人事総覧「台湾編」』「昭和一四年七月一日現在」に拠る。
- (17) 昭和四年頃に台北帝大文政学部の一部の教員を主に「書物の会」が組織され、後に『台日』社の河村徹社長等の提唱で、台北帝大図書館附設の「台湾愛書会」に発展し、昭和八年六月に愛書趣味を標榜した雑誌『愛書』を発行(昭和一七年八月に第一五輯を出して停刊)、第二輯から西川満が編集した。
- (18) 注(2)で言及した「協会」発行の「会報・壹」の「義納」欄に「本協会の主旨を賛し、物質的に賛助せられたる方、左の如し」として、「賛助会員」の金関丈夫、国府種武、神田喜一郎、鄭津梁、草薙晋、世良寿男、石黒魯平、安藤正次、飯沼龍遠、西岡英夫、小林土志朗の名が挙がっている。つまり、「賛助会員」は「協会」の会費は不要であったが、「協会」の「附則」に「物質的に本会を支持」したことが解る。
- (19) 昭和一四年一二月二四日『台日』掲載「台湾文芸家協会の『文芸台湾』近刊」。
- (20) 「ゆうかり派」の人数は、昭和七年頃のデータ。藤田芳仲「台湾俳壇展望」(昭和七年九月一日『台湾時報』第号)に拠る。山本孕江については、以下の通り。明治二六年一二月、高知市生まれ。本名は山本昇。高浜虚子に師事したホトトギス派の俳人で大正三年秋に打狗(高雄)に渡り、大正七年頃、哨船頭吟社に入り石楠同人だった松田刻積から俳句の指導を受ける。大正八年に結婚し、同一年五月に台北に移り、台湾教育会囑託となる。台北ではホトトギス系のミナミ吟社に属したが、同年一月に俳誌『ゆうかり』を創刊。以降台湾俳句界のリーダー的存在となる。渡台以降大正八年から昭和一五年までに作った俳句から六四六句を選び、昭和一七年一二月一日『山本孕江句集』(ゆうかり社内山本孕江句集刊行会、高浜虚子「序」装幀・挿絵宮田弥太郎)を刊行した。参考：龍造寺晋「山本孕江論」(昭和一年四月一日『台湾時報』第一九七号) 宮下今日子「台湾の俳句」(二 年四月三日『朱夏』14)。
- (21) 西川満「『華麗島』のころ(年譜9)」(一九九 年六月六日人間の星社、西川満『わが越えし幾山河』)
- (22) 昭和一五年四月二日『台日』「小説と詩との研究会成立」。
- (23) 『文芸台湾』の同人制については、その規約が東方版『文芸台湾』第六号(昭和一五年一二月一日)に添付された「会報・貳」に、下記のように掲載されている。
- 「同人制度(抄)」
- 一、同人は毎月同人費を納むる名誉と義務とを有す
- 一、同人費は月額二円とす(従つて会員より同人に転ずる場合は便宜上既納の半箇年分を一月分と見做し、爾後右に従ふ)
- 一、同人費は必ず前月末日までに必ず納付すること(事情により滞納の場合は必ず諒解を得ること)
- 一、同人を脱退する場合は義務を完全に果たした上文書を以て届出づること

一、理由なくして滞納久しきに及ぶ場合は、会報紙上にて除名すること 以上  
換言すれば右制度は腹の底から手を握つて協力する同志を求むがために我等神明に誓つて定めたるものなり  
「文芸台湾」同人

- (24) 『文芸台湾』第六号の巻頭に五 名の同人名簿が掲げられている。
- (25) 柳書琴「戦争と文壇 盧溝橋事変後の台湾文学活動の復興」(一九九五年一 月三 日、東方書店『よみがえる台湾文学』)。
- (26) 島田謹二「詩人西川満の業績」(昭和五六年十一月二三日『アンドロメダ』第一四七号)。当時、西川満は宗教団体「日本天后会」の総裁をしていたので、島田は西川満を「総裁」と呼んでいる。この一文は、「日本天后会」二 周年記念の講演としては行われたものの筆記である。
- (27) 楊達「新聞配達夫」(昭和九年一 月『文学評論』第一卷第八号) 呂赫若「牛車」(同一 年一月『文学評論』第二卷第一号) 龍瑛宗「パパイヤのある街」(同一二年四月『改造』第一九卷第四号)を指す。
- (28) 「松風子」とは、島田謹二のことである。島田は当時『台湾時報』を主に「華麗島文学志」のタイトルで、領台以降来台した日本文芸家についての研究を発表していた。